

色鮮やか癒やしの光

室蘭出身のステンドグラス作家、吉田房子さん。札幌市在住の作品展が、製鉄記念室蘭病院・せいてつギャラリーで開催されている。色鮮やかなガラスと照明や陽光が共演した光の芸術が、患者や通院の市民らの癒やしとなっている。来年1月10日まで。
(吉本大樹)

故郷室蘭で初の作品展

吉田さんは、室蘭市母恋北町で育ち、室蘭清水丘高校を卒業してから上京。都内の美術学校で学んだ後、インテリアコーディネーターとしてホテルやレストランの内装を手掛けた。結婚を機に移り住んだ札幌でステンドグラスの教室に通い技術を習得。今年から個展を開き始め、故郷室蘭では初めて作品を披露した。今回のテーマは「ガラスと光が織りなす癒やしのハーモニー」。約80点を出品し、この展示のために作った物も多数。幼き思い出は母恋富士で追いかけたチョウや海でたわむれた魚たちとの記憶を込めた。旅行で訪れたハワイやスペインの情景をモチーフにした作品も並んだ。いずれも照明の

ステンドグラス作家・吉田房子さん

当たり方や窓の採光に合わせて配置にこだわった。ステンドグラスの特徴について「光を通すのが他の芸術と違つところ。自然光や電球で色の見え方が変わってきます」と語る吉田さん。「癒やし」を主題に制作活動を続け、これまでホテルなどを会場としてきたが病院では初めて。病院での待ち時間に作品を楽しんだ古川敏子さん(90)は「どれも素晴らしくて息をのんだ。光に当たるとなおきれいですね」と感心した様子。会場には高校時代の同窓生も訪れ、思い出話に花。吉田さんは「ヒーリングアート」を追い求め、大勢に喜びを感じてもらいたい」と笑顔を見せていた。



照明を浴び、色彩が映えるステンドグラスと吉田さん